

ジェンダー・バイアス

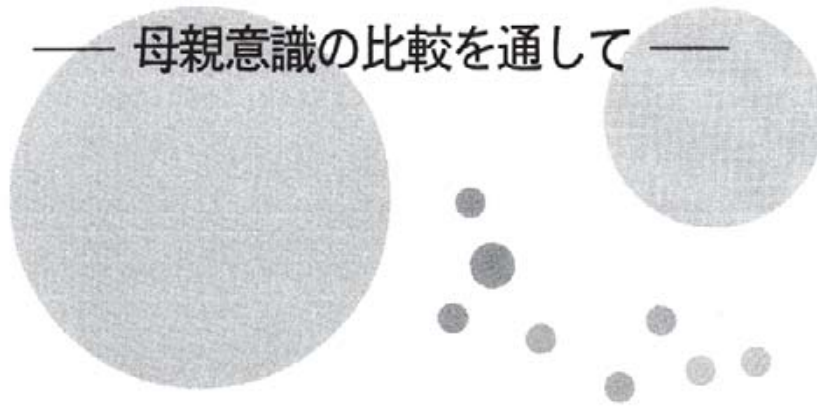
目次

日本型ジェンダー論の可能性	深谷昌志	2
〔調査レポート〕ジェンダー・バイアス	田村 毅・遠田瑞穂	7
要約		8
はじめに		12
1. 性役割が子どもに及ぼす影響		13
●自己像		15
2. 学校生活とジェンダー		16
●学校の中のジェンダー・バイアス		21
●男女平等：子どもたちはどう考えているか		24
3. 遊びとジェンダー		25
4. 家庭とジェンダー		27
●「女は家庭、男は仕事」について		27
●なぜ性別による違いが生じるのか		30
5. 子どもの将来とジェンダー		34
●どんな仕事につきたいか		34
●将来像とジェンダー		40
まとめ		45
〔対談〕ジェンダー・バイアスを考える	山村賢明 vs 深谷昌志	47
・文献紹介『日本人と母』		55
資料1 調査票見本		59
資料2 基礎集計表		69

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

日本型ジェンダー論の可能性

— 母親意識の比較を通して —



静岡大学教授
深谷昌志

ジェンダー論はこの10年くらいの間にも最も深まりを示した研究領域であろう。ジェンダー・バイアス（性的な偏見）のもたらす歪みがどのようなもので、そのバイアスが生まれる背景としてどういう要因が働くのかなど、克明な分析を試みると同時に、バイアスを克服するための方策も提唱している。

そうした研究成果を高く評価しながらも、ジェンダー論が欧米の研究者の影響をストレートに受けているのが気になる。あらためてふれるまでもなく、結婚の成り立ちから家庭の形まで、欧米と日本とではかなりの開きがある。

それにもかかわらず、ジェンダー論では欧米の研究者の思想を忠実に訳出して紹介している感じが強い。そして、日本的な風土のとらえ方が乏しいので、ややもすると、理論が現実感覚を持たずに説得力に欠ける場合もある。そこで、母親を例にして、それぞれの社会の女性の生き方を紹介することにしよう。

東京の母は「バランス感覚のよさ」

この10年来、子どもを対象とした国際比較調査を行ってきたので、子どもに強い影響を与える親、特に母親についての比較調査を実施したいと思うようになった。とりあえず、日本に近接しているところから調査を始めようということで、東京とソウル、北京で調査を行った。そして、現在、シカゴやサンパウロで調査を実施し、それらのデータの解析を急いでいる状況下にある。

ここでは、ソウルと北京の母親事情を考察することにしよう。なお、母親としての意識の社会による違いを鮮明にだすことを考え、中学生を持つ母親を調査対象にした。

こうした比較調査を行うと、それぞれの都市によって母親の姿そのものが異なっているのがわかる。表1の就労状況が示すように、北京の母親の86%はフルタイムで働いている。

それに対し、ソウルの母親のフルタイム率は18%で、43%の母親が専業主婦の生活を送っている。

「北京＝フルタイム」「ソウル＝専業主婦」が印象的な中で、東京の母親を特徴づけているのはパートタイムで働く人の多さで、母親の32%を占める。その他は、専業主婦が29%、フルタイム19%、自営12%などとなる。

こうした開きはそれぞれの社会の歴史的背景や文化的な価値観などを反映しているので、どの形が望ましいかはいいにくいですが、東京の母親たちはフルタイムで働く家事や育児を十分にできない。かといって、家の中にいるだけでは自分を発揮できない。そこで、パートという形で、家事と仕事との両立を図ったのであろう。

東京の母親たちの就労状況を調べてみると、結婚まで仕事を持っていた人は74%に達する。

しかし、62%は結婚あるいは出産を契機として仕事をやめ、専業主婦の生活に入っている。日本の労働条件が厳しく、残業などをしないと一人前に扱ってくれないので、家事との両立を図りにくい。あるいは、育児施設が貧困で、安心して子どもを預けられる所を見出しにくい。そうした事情が加わっての退職であろう。

そして、23%が子育てが一段落し、子どもが小学高学年になってから仕事を再開している。「結婚前後に退職し、子育てが一段落してから仕事を始める」いわゆるM字型の就労形態である。なお、結婚前から現在までフルタイムで働き続けた人は9%にすぎない。

そうした意味で、東京の母親に家事・育児か仕事かのどちらにも片寄せずに、家庭を優先させながら社会復帰も目指すというバランス感覚のよさを感じる。

表1 母親たちの職業のスタイル

	東京	ソウル	北京
フルタイム	19.2	18.2	86.2
パートタイム	31.8	4.9	3.3
自家営業	11.5	19.9	1.3
専業主婦	29.1	43.4	1.8
内職・その他	8.4	13.6	7.4

○は最大値

「子どもに献身的」なソウルの母

表2に「子どもの持つ意味」を母親たちに尋ねた結果を示した。「子どもの成長が楽しみ」と感じる気持ちは、どの社会の母親にも共通している。そうした中で、ソウルの母親の54%が子どもを「家（名）を継ぐ存在」とみなしているのが興味深い。ちなみに、日本の母親がそう思う割合は8%にとどまる。

そうした数値が示すように、現在の日本では「家名を汚す」などという感覚は失われている。しかし、韓国の人、特に男性は、程度の差はあれ「ジョクボ（族譜）」を意識しているといわれる。ジョクボは一種の家系図で、ジョクボを見れば、自分がどこの出身の李で何代目かがわかる。そして、韓国の男性たちは祖先から家柄を引き継ぎ子孫に家名を残すつなぎ役として自分が存在すると考えている。したがって、息子が生まれずに自分の代で家名が断絶するのはとんでもない親不孝、先祖

不孝になる。そして子どもが生まれたら、なんとか子どもを立身させ家名を高めたいと願っている。

そうした文化的な分脈の中に子育てが位置づくので、結婚した女性にとって何より大事なのは男子の出産、そして、その男子を社会的に成功させることになる。

ソウルの名門大学・梨花女子大を卒業した母親たちの話を聞く機会があった。大学で英文学を学んだから英語を生かした仕事につきたいと思っていた。しかし、韓国の受験状況はとても厳しいので、母親が働きながら子どもに望み通りの進学を期待するのは困難だ。特に、子どもの頃からのしつけが大事になるので、残念だが、専業主婦として子どもの教育にあたることにしたという。

テレビなどで、大学進学共通テストの前から水ごりをしたり、お宮参りをして子どもの合格を祈る韓国の母親の姿が紹介されることが多い。実際にソウルでは、大学受験は「3当4落」だという。4時間寝ていたのでは名

表2 子どもの意味

	東京	ソウル	北京
成長が楽しみ	67.3	65.8	88.8
いつも気になる存在	62.1	83.0	78.8
無条件にかわいい	54.4	52.4	77.2
家での話題の中心	43.4	59.7	67.4
夫婦をつなぐきずな	26.7	56.1	72.5
家（名）を継ぐ	7.9	54.1	18.0

「とても」+「かなり」そう思う割合
○は最大値

門大学への進学はおぼつかないらしい。そうした受験の門を突破して一流大学に子どもを進学させ、家名を高める。そのためなら、どんな苦勞でもいとわないのがソウルの母親たちの心情となる。

なお、子どもを大学に進学させたい割合はソウル95%、北京71%、東京66%で、ソウルの母親の進学期待の高さがわかるが、その中でも、「なんとしても一流大学へ」と願う割合は東京は13%だが、ソウルは39%に達する。

「一人っ子を大事に」育てる北京の母

中国というと一人っ子政策を連想する。たしかに、日曜の午後など北京の繁華街である王府井などで、着飾らせた一人っ子と手をつないで歩いている若い夫婦に出会う。どの親子も子ども1人なので、子どもが夫婦の宝という感じで、子どものことを「小皇帝（小太陽）」というのはよくわかる。

北京で何人かの40代の女性たちから話を聞

く機会があった。話してくれたのが大学教師や上級官僚だったせいか、自分たちの生育史を淡々と語ってくれた。その中で印象的だったのは、「自分たちは3度の大きな変革を体験したので、何も信じられなくなった」の言葉だった。

聞いてみると、8歳のときに文化大革命が始まり、学校で勉強もせずに農村で働いた。10年間にわたった文化大革命が終わり、ほっとしたのもつかの間、結婚直後に急激な人口増加を抑制するために一人っ子政策が始まった。「錯批一人、誤増三億」（人口抑制政策を唱えた馬寅初北京大学学長を批判したために、3億の人口が増えてしまった）を納得して、一人っ子政策に協力したが、加えて一連の開放政策による大幅な社会主義体制の変革である。そうなる何を信じたらよいかわからなくなった。でも、一昔前と比べると、自由なものが言えるようになってうれしい。だから、せめて家族を大事に生きていきたいという。

表3に「妻からみた夫のタイプ」の結果を

表3 妻の立場から見た夫のタイプ

	(%)		
	東京	ソウル	北京
子どもをかわいがる	25.7	30.3	70.0
子どもから親しまれている	19.2	28.5	55.8
あなたを大事にしてくれる	18.8	30.4	60.9
子どもから尊敬されている	17.7	30.8	63.0
仕事第一で家庭のことをしない	10.7	5.3	36.3
料理、洗濯などを手伝ってくれる	7.4	8.2	42.3
妻が仕事をするのは反対	5.3	17.9	11.9

「とてもそう思う」割合
○は最大値

示した。東京やソウルに比べ、北京の父親は子どもや妻を大事にして家庭的なように見える。中国では晩婚・晩産が奨励されている。具体的には、住宅事情がよくないので、住まいの割り当てをもらうために、結婚にも職場の承認が必要となる。その上、職場内で話し合っただけで出産の順番を決めるので、親になるのも容易ではない。それだけに、家庭を大事にしたいという気持ちが強いのであろう。

なお、中国では第2次大戦後、内戦が続いたので、女子も積極的に仕事に従事していた。加えて1950年代を中心に毛沢東により性差を解消しようという運動が展開されたので、結婚後はむろん、出産後も女性が仕事を持つ生き方が一般化している。

それだけに、乳幼児期の育児施設は充実していて、土日を除いて、24時間の保育をする「全託」が基本で、子どもを夕方引き取る「日託」は少数にとどまっている。加えて、小学校でも社会主義の名残で、集団活動が重視されているし、放課後も公立のけいこごとセンターともいえる「活動センター」（優秀な子は「少年宮」へ）が充実しているので、子どもたちは集団の中に育っており、日本で懸念されるような「一人っ子育ちのひ弱さ」はあまり感じられない。

なお、「一人っ子政策」といわれるが、①農村部や②少数民族、③上の子が心身面で障害を持つ場合などに2人の子を持つことが認められているのは周知の通りであろう。

「幸せな」東京の母

「あなたが仕事を持っていたとして、小学2年生のお子さんが38度の熱を出したら、あなたは仕事を休むと思いますか」の問いに、北京の母親の72%は「休まない」と答えている。仕事と育児かの究極的な選択を迫られたとき、仕事を優先するタイプである。それに対し、ソウルの母親の74%、東京の61%が「休む」と回答している。子育てを大事にする

タイプになる。

こうした国際比較調査を行ってみると、東京の母親はソウルほどではないが、子どもを大事にした生き方をしているのが目につく。それでは、ソウルと東京の母親の違いはどこにあるのか。すでにふれたように、ソウルの母親は家意識を持って子育てをしていたのに対し、東京の母親は家意識から解放され、子育てそのものを楽しんでいる。

北京と同じように、ソウルでも40代の母親の生育史を尋ねてみた。朝鮮動乱直後の動乱期に生まれ、北との緊張間の中で、10代を過ごした。女性がなんとか自由にふるまえるようになったのは、ソウル五輪以後くらいからだが、それでも韓国は儒教の名残が強く、女性の生きにくい社会だという。

そうした比較を試みたとき、東京の40代の母親は子どもの頃に東京五輪を体験し、経済の成長とともに不自由なく育ってきた幸せな世代であろう。女性に対する偏見も急速に薄らいでくる中で育ってきた。それだけに、「母親として幸せ」と思う割合は東京が最も高く81%で、北京は69%、ソウルは49%となる。また、「生まれ変わったら男性に」と望む割合は、北京の母親は59%、ソウルも57%で、東京の32%と際だった対比を示している。東京は母親が母親としての幸せを感じられる社会なのであろう。

北京やソウルと比較すると、東京の母親は優雅で自由な生活を送っているように見える。でも、母親たちの62%は「なんとなく毎日がむなし」と感じ、67%は「何かに打ち込みたい」と答えている。幸せなのはたしかだが、何か満ち足りない。そうした悩みが深いのが東京の母親なのかもしれない。

いずれにせよ、こうした分析を行っているとき、それぞれの社会の母親がそれぞれの社会的な背景をふまえて暮らしているのがわかる。ジェンダー論を展開する際にも、そうした社会的な背景を視野に入れて理論的な考察を試みるのが望ましいように思った。

〔調査レポート〕

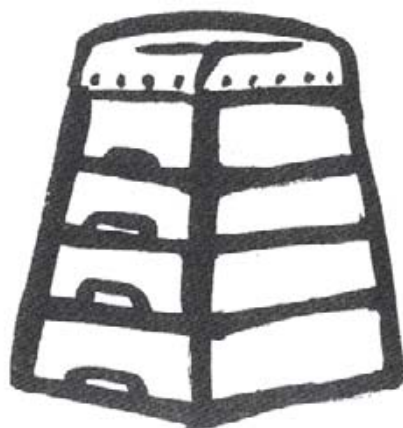
ジェンダー・バイアス

東京学芸大学助教授

田村 毅

群馬女子短期大学講師

遠田瑞穂



調査レポート

ジェンダー・バイアス

要約

●調査概要

1. 調査主題 ジェンダー・バイアス
2. 調査視点 自分が女子または男子であることをどうとらえているか、そして性別によって、学校生活、自由時間、あるいは家庭生活がどの程度影響を受けているのか、さらに、自己像や将来への展望、職業選択などにどのような差があるのか明らかにする。その中から、われわれの心の中に潜む「男らしさ、女らしさ」の期待について点検する。性役割が着実に変化している社会的背景を踏まえ、これからの21世紀を生きる子どもたちが、どのような性役割を担っていくのか、また、親や教師はどのように子どもたちにジェンダーを伝えていったらよいのかを探る。
3. 調査項目 自己像、教科、係活動、学校生活などの好み、学校内のジェンダー・バイアス、男女平等教育、遊び、家庭のジェンダー・バイアス、進学希望、職業選択、など。
4. 調査時期 1995年2月
5. 調査対象 全国の小学5年生
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査
7. サンプル数 3,200人（女子 1,588人、男子 1,612人）

1. ほぼ半数の女子が女に生まれて損をした体験を持つのに対して、男子は2割に満たない。女子の方が、男子よりも明らかに自分の性を不利に感じている。(図1)

2. もし生まれ変わることができるなら、男子は9割がまた男子に生まれ変わることが望んでいるが、女子は女子に生まれ変わりたいと望んでいる子が6割しかいない。(図2)

3. たくましい、頭がいい、かわいい、おしゃれなどの観点から、男女別にどの程度肯定的な自己像を持っているかを集計したところ、「たくましい」と「頭がいい」については男子に多く、「かわいい」と「おしゃれ」については女子が多かった。(図3)

4. 女子が好む科目は国語、音楽、家庭科である。男子が好む科目は算数、理科、社会、体育、図工である。主要4教科のうち、国語以外は男子の方が好む割合が高い。(図4)

7. 学校で、「女子と男子を差別されてくやしい」と思ったことが「たくさんある」と答えた子は男子20%、女子14%、男子の方がやや上回る。(図8)

5. 給食係、保健係、飼育係、新聞係、図書係、清掃係などの係活動は、すべて女子の方が男子よりも好んでいる。女子は「他人のお世話をする」ことに自分たちの役割を見い出しているであろう。(図5)



8. 教師が「男の子だから～」「女の子だから～」とふだん多く口にしてるほど、子どもたちは学校で性による差別を強く感じている。(図9)

6. 学校生活の中で、男子には、活発に発言したり、元気に遊ぶなど、積極性、リーダーシップ、活発さなどが求められている。一方、女子には給食のおかずを配る、掃除をする、動物の世話をするなど、伝統的に女性の役割とされてきた他人に対する奉仕・世話などが求められている。(図6)



9. 男女平等教育の一貫としての男女混合名簿、集会や行事における男女混成などに対する子どもたちの支持は2～3割程度である。(図10)

10. 遊びの内容は男女で大きく異なる。女子はおり紙、あやとり、お手玉、ゴムとび、ままごとなど、どちらかといえば室内遊びが、男子はサッカー、野球、すもうなどの外で体を動かす活動的な遊びが多い。(図11)



11. 家での手伝いをみると、男子の方が多いのはゴミを出すことだけで、食事の準備・後かたづけ、掃除、洗濯、お使いなどは、すべて女子の方が多い。(図12)

12. 「女の人は家の中の仕事や家族の世話が大切だから、あまり外で仕事をしない方がよい」という考え方について、男子の5割、女子の3割が賛成している。(図13)

13. 同様に「男の人は仕事大切だから、家の中の仕事や家族の世話はあまりしない方がよい」という考え方についても、男子の方が多く賛成している。(図14)

14. 家庭における親の役割分担をみると、子どもを叱ったり、一緒に出かけたりにするなど、子どもとのやりとりに関しては、母親と父親がだいたい同じくらいだが、食事の用意や洗濯、掃除といった家庭のこまごまとした仕事はほとんど母親が行っている。(表1)



15. 親は「女の子だから～」「男の子だから～」といったジェンダー・バイアスを含んだ言葉を女の子に対してはよく口にするが、男の子にはそれほどでもないようである（表2）。これらの言葉は学校で先生から言われるよりも、家庭で親から言われる方が多い。（図15、16）

16. 将来の進学希望について、女子は専門学校、短大を希望する割合が男子よりも多く、4年制の大学や大学院を希望するのは男子の方がやや多い。（図17）

17. 将来、やってみたい仕事について、女子は幼稚園や保育園の先生が最も多く、次いでケーキ屋さん、タレント、お花屋さんなどである。男子はスポーツ選手がトップ、次いでタレント、マンガ家、コックさん・板前さん、宇宙飛行士などである。（図18）



18. 小学校の先生、お医者さん、警察官など、いくつかの職種の女性の職業占有率を推測してもらくと、ほとんどの職業について、女子の方が男子よりも多く推測している（表3）。また、実際の女性の職業占有率と子どもたちの推測を比べると、実際は小学校の先生以外は子どもたちの推測よりもはるかに女性の割合が少ない。（表4）

19. 子どもたちの将来像について、お金持ちになったり、仕事を一生懸命にしたり、さらに有名になったりといった社会的達成に関しては、男子が積極的であり、困っている人を助けたり、子どもを大切に育てるといった、他者に対する配慮や子育てについては女子の方がやや高くなっている。（図20）

20. 女子も男子も自分の性を肯定している子どもの方が、将来の職業選択について幅広い分野に積極的である。また社会的達成や他者に対する心遣い、子育てなどの意欲も高い。（表5、図22）

はじめに

「男子厨房に入らず」、あるいは「女性は一生のうちに3人の男性に従う（三従の教え）」といった、男女の役割や役割がはっきり区別されていた時代が終わり、男女が平等で自由に職業や生き方を選択できる時代になって50年が経つ。以前に比べれば女性の社会進出も進み、男女における機会の差は縮まってきた。しかし、その一方で、男女の雇用機会は十分に均等だとは言えず、またセクシャル・ハラスメントなど女性に対する社会的不利益が存在するのも事実である。

子どもたちの世界に目を向けてみよう。少なくとも、建て前の上では、教育は完全に男女平等である。女子の高等教育への進学率は年々高まり、短大を含めれば、男子の大学進学率を上回る時代になった。しかし、専攻分野の内訳をみると、女子は家政、人文、教育などに、男子は工学、法学、経済などに偏り、依然として男子向き、女子向きのコースがあることも事実である。

子どもたちは、自分が男であること、女であることについてどうとらえているであろうか。女であること、あるいは男であることによって、何らかの不利益を受けてはいないだろうか。女であること、男であることによって、自由な発想や行動が制限されたり、のびのびと個性を伸ばすことが妨げられていることはないだろうか。教師や親たちは、「男だから～」「女だから～」と、何気ない言葉や

態度から男女を区別したり差別していることはないだろうか。

日本語の「性」という言葉には、「セックス」と「ジェンダー」という2つの側面がある。「性（セックス）」は生物的・肉体的な側面を意味する。一方、「性（ジェンダー）」は社会的・文化的な性役割を指す。人間は、生まれもってきた自分の性（セックス）を土台に、社会の中で一定の役割やふさわしい行動をとるようにまわりから期待され、それを自分の特性として身につけていく。したがって、性（セックス）は不変であるが、性役割（ジェンダー）は時代や文化によってさまざまに変化するわけである。

今回は、子どもたちの「性役割（ジェンダー）」について焦点を当てた。全国の小学5年生3,200人を対象に、自分が女子あるいは男子であることをどうとらえているか、性別によって、学校生活、自由時間、あるいは家庭生活がどの程度影響を受けているのか、さらに、自己像や将来への展望、職業選択などにどのような差があるのか明らかにする。その中から、われわれの心の中に潜む「男らしさ、女らしさ」の期待について点検する。性役割が着実に変化している社会的背景を踏まえ、これからの21世紀を生きる子どもたちがどのような性役割を担っていくのか、また、親や教師はどのように子どもたちにジェンダーを伝えていったらよいのかを探ってみよう。



性役割が子どもに及ぼす影響



子どもたちは、自分の性についてどうとらえているのだろうか。対象者に、自分の性に生まれて「損した」と思った体験の有無について尋ねた(図1)。「損した」と思ったことが「たくさんある」と答えた女子が1割、「ときどきある」が4割で、合わせるとほぼ半数の女子が女に生まれて損をした体験を持つ。一方、男子は「たくさんある」が4%しかおらず、「ときどきある」を合わせても「男に生まれて損した」体験を持つ子が2割に満たない。つまり女子の方が、男子よりも明らかに自分の性を不利に感じていることがわかる。

また、図2には「もし生まれ変われるとしたら、男子・女子のどちらがよいか」という形で、自分の性をどれだけ肯定的にとらえているかについて探った。一般的に自分の性が有利、あるいは快適だと考えている子どもはこのような設問に対し、自分の性に生まれ変わることを望む。男子は9割以上が、男子に生まれ変わることを望んでいる。一方、女子

は「女子に生まれ変わりたい」と望んでいる子が6割強しかおらず、残りの4割弱は男子に生まれ変わりたいと望んでいる。男子は9割が自分の性について肯定的にとらえることができるのに、女子はその割合がぐっと下がることがわかる。

これらのことから、子どもたちの世界で、女子よりも男子が「得な性」ととらえられていることがみえてきた。これは日本の子どもたちだけにみられる現象であろうか。ここで海外の子どもたちと比較してみよう。東京、上海、ロンドン、ニューヨークの4つの地域の子どもたちに同様な調査を行ったところ、男子が男子への生まれ変わりを望むのはいずれの地域でも9割以上の高い数値で、地域差はない(『モノグラフ・小学生ナウ』Vol.14-4)。しかし、女子の場合、ロンドンとニューヨークに比べて、東京と上海の方が女子への生まれ変わりを希望する割合が低い。東京と上海の方がより強く、女子が不利だと感じているのだろう。

このデータを見る限り、男子の方が「得」であるという見方はある程度共通しているようである。しかし、男女の差はロンドンとニューヨークに少ない。いずれの国においても男性中心の社会の中で、女性が不利益を被ってきた歴史を持つ。しかし、イギリスやアメリカでは、それを克服するための意識の改革と努力をはらってきて、その結果、子ども

もたちが男女とも自分の性に自信を持てるようになってきた。その点、日本の子どもたちは、まだまだ男女間の差があるようだ。逆にいえば、今後、われわれの努力如何によって、両性にとって同等に、より居心地のよい環境、自分の性に生まれてきてよかったと感じることのできる社会をつくることのできる可能性を秘めていることになる。

図1 女(男)に生まれて損した体験

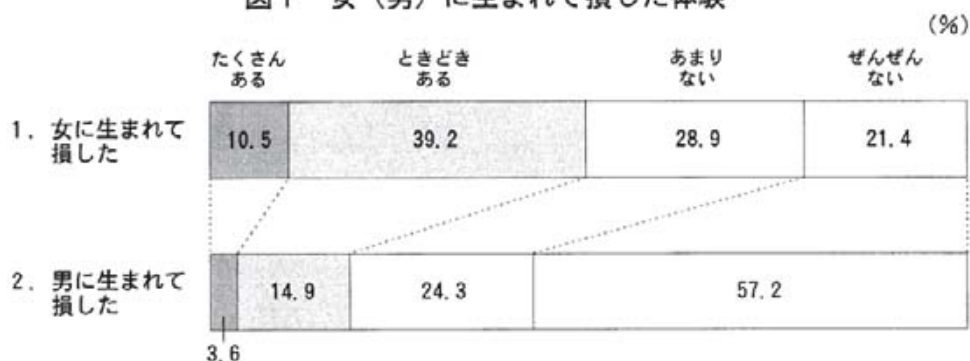
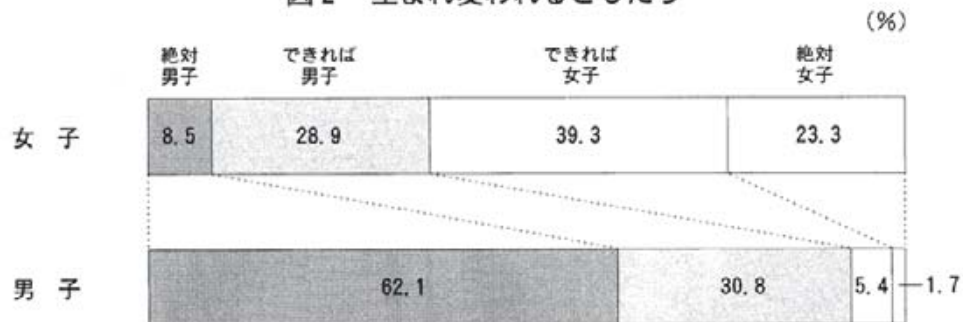


図2 生まれ変われるとしたら



●自己像)))

たくましい、頭がいい、かわいい、おしゃれなどの観点から、男女別にどの程度肯定的な自己像を持っているのか集計したところ、「たくましい」と「頭がいい」については男子に多く、「かわいい」と「おしゃれ」については女子に多かった(図3)。

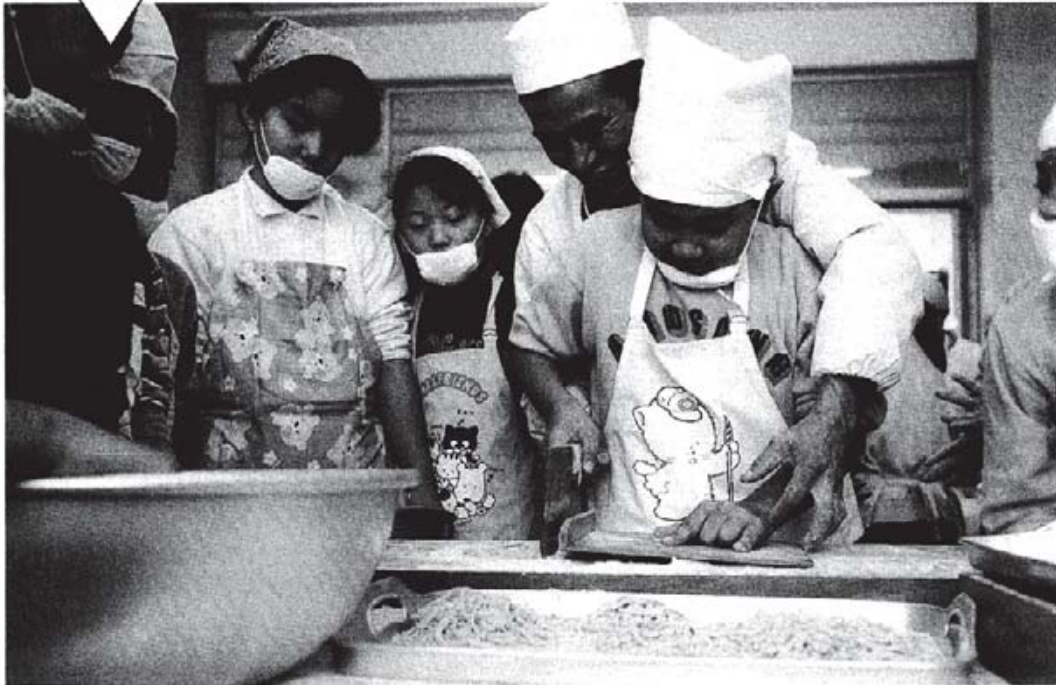
本来、子どもたちは千差万別であり、自分を肯定的に評価できる子からそうでない子までさまざまである。したがって、男女別に集計しても、本来なら差はみられず、一様に分布するはずである。しかし、実際には違う。まわりから期待されている「女らしさ」「男らしさ」に接し、子どもたちも無意識のうちにそれに応えようとする。したがって、たく

ましさや、頭がいいことは男子に期待された性質であり、かわいさ、おしゃれなどは女子に期待された性質であるといえよう。このように性役割は、いわゆる「隠れたメッセージ」として知らないうちに子どもたちの心に浸透していく。そして、子どもの性格まである程度規定してしまうことになる。

では、具体的に、子どもたちはどのような場面で、「女らしさ」「男らしさ」をまわりから期待され、自分の中に取り込んでいくのだろうか。以下の章では、学校生活、遊びの中、そして、家庭の中での見えない性役割(ジェンダー)について考えてみたい。

図3 自己像

		(%)			
		とても そう	少し そう	少し 違う	ぜんぜん 違う
1. たくましい	女子	8.8	23.4	41.4	26.4
	男子	16.7	27.1	37.0	19.2
2. 頭がいい	女子	9.2	21.0	36.6	33.2
	男子	19.9	27.3	25.9	26.9
3. かわいい	女子	8.9	13.9	33.4	43.8
	男子	9.4	10.0	30.3	50.3
4. おしゃれ	女子	14.9	27.3	34.4	23.4
	男子	10.0	14.8	27.9	47.3



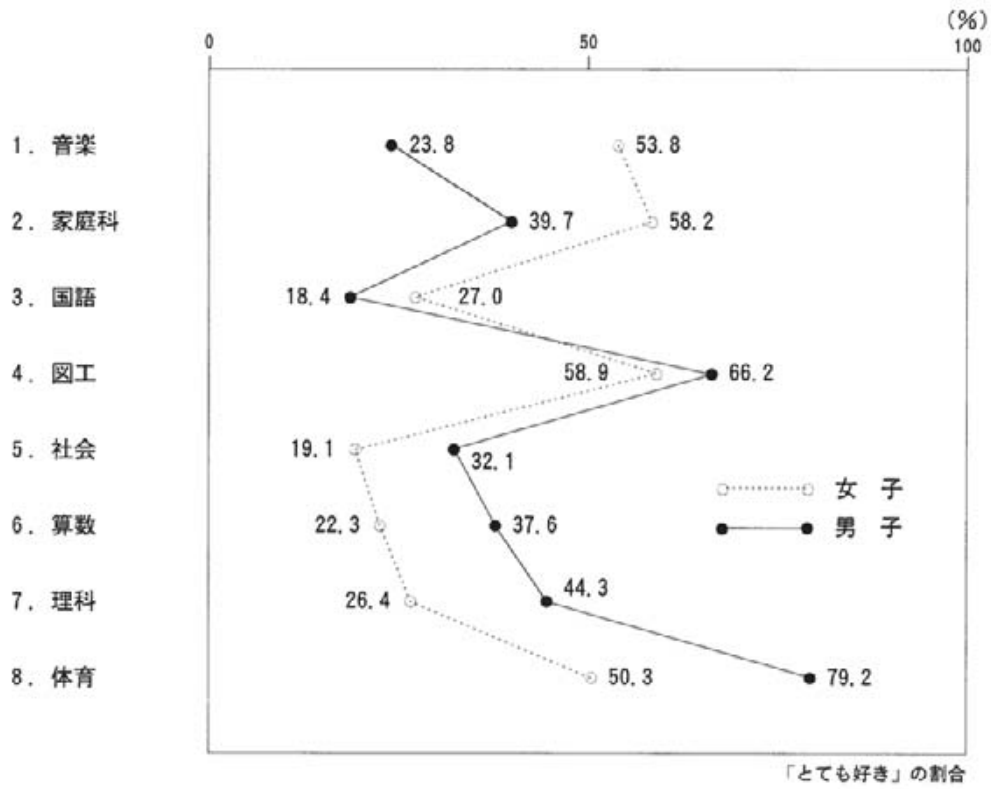
学校での生活が、性別によってどのように塗り分けられているのかみていこう。

まず、教科の好みである。8つの教科それぞれについての好き嫌いを尋ね、男女別に集計した(図4)。男女の好みの差は明らかである。女子が好む教科は国語、音楽、家庭科であり、男子が好む教科は算数、理科、社会、体育、図工である。主要4教科のうち、国語以外は男子の方が好む割合が高い。

大脳の構造が男女で微妙に異なることが指

摘されている。確かに、女性の方が国語や外国語などの言語能力に優れ、男性が空間認識に優れているという研究成果もある。しかし、それだけで子どもたちの教科の好みの差を説明できるのだろうか。子ども同士、あるいは親や教師との会話の中で、はっきりとは言わないまでも、「女の子向きの教科」「男の子向きの教科」という塗り分けができてはいないだろうか。

図4 教科の好き嫌い



次に、係活動の好みについて比べてみよう。学級委員をはじめ、一般的と思われる7つの係活動について比較した(図5)。学級委員は女子の方が好むものの、その差はわずかである。それ以外の6つの係、すなわち給食係、保健係、飼育係、新聞係、図書係、清掃係すべてにおいて、男子よりも女子の方に好む割合が高い。特に保健係と飼育係に顕著に表れている。係活動、つまりクラスのために働いたり、動物や他人のお世話をするのは女子に任せておけばよい、男子はそんな面倒くさいことよりも、勉強や遊びなど、自分のことに専念すればよい、というような意識が子どもたちの間にあるのだろうか。また、そのような意識をつくることに、おとなたちは加担していないだろうか。おとなたちの世界、つまり企業や家庭の中で、「仕事をするのは男、お世話をするのが女」という構図は一般的である。はっきりと言葉で伝えなくても、子どもたちはおとなの世界を敏感に感じとっている。そのような目に見えない影響のもとで、女子は「他人のお世話をする」ことに自分たちの役割を見い出しているのであろう。

次に学校生活の一般的な活動についてみてみよう(図6)。「授業中、手をあげて自分の意見を言う」ことと、「休み時間に校庭で元気に遊ぶ」ことは女子よりも男子に多い。しかし、それ以外の項目はすべて女子の方が多くなっている。

ここでも、男子と女子にそれぞれ期待されている性質や役割の差を読みとることができる。男子には、活発に発言したり、元気に遊ぶなど、積極性、リーダーシップ、活発さなどが求められている。一方、女子には給食のおかずを配る、掃除をする、動物の世話をするなど、伝統的に女性の役割とされてきた他人に対する奉仕・世話などが求められている。そのことは友人をかばってあげるという他者に対する配慮・心遣いにも通じるところがある。

また、女子の方が友だちとおしゃべりしたり、一緒にトイレに行ったりと、友人とのかかわりが多いことがわかる。女子の方が他者とかわることが得意であり、またそのことを必要としているのであろう。

図5 係活動

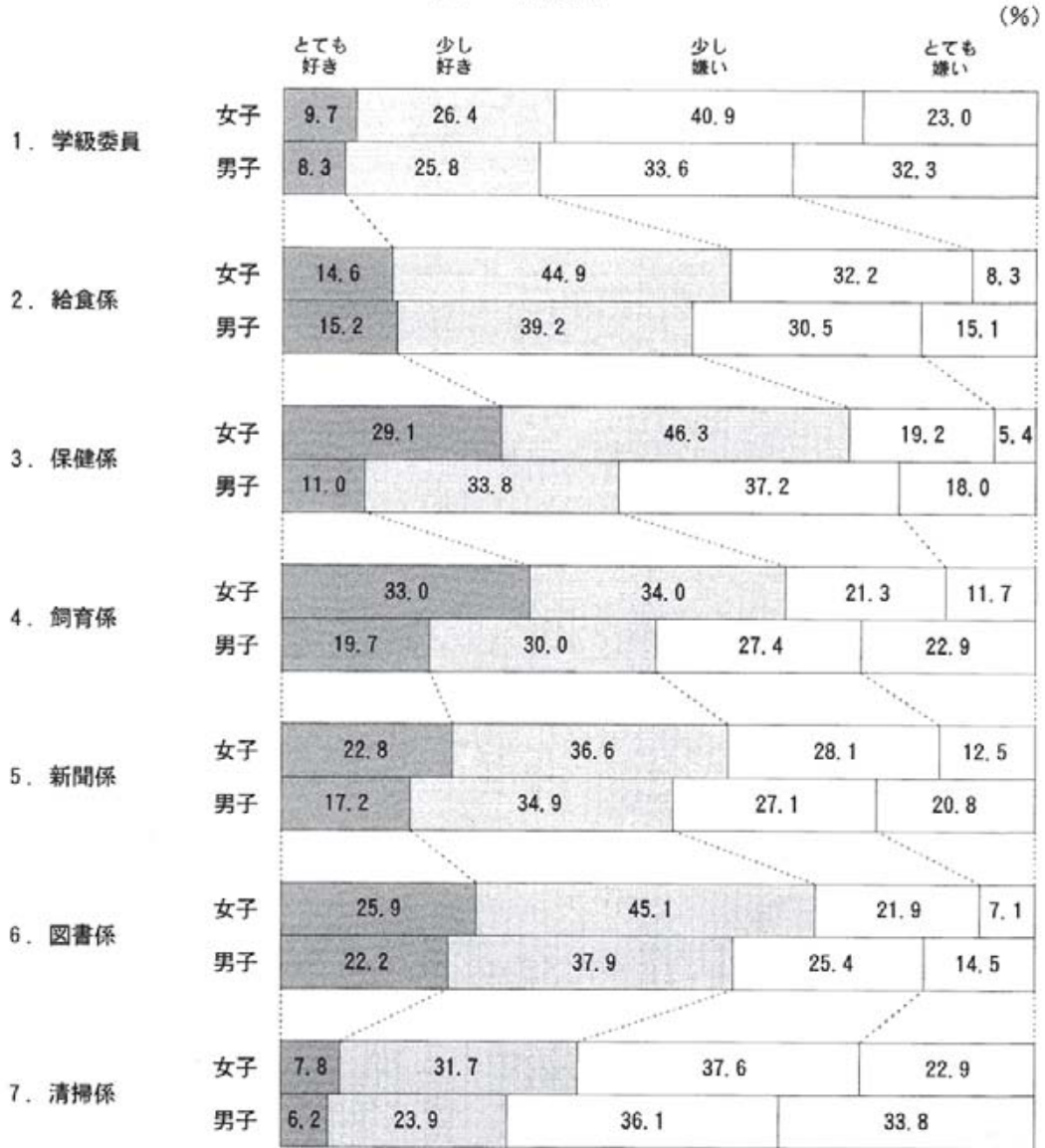
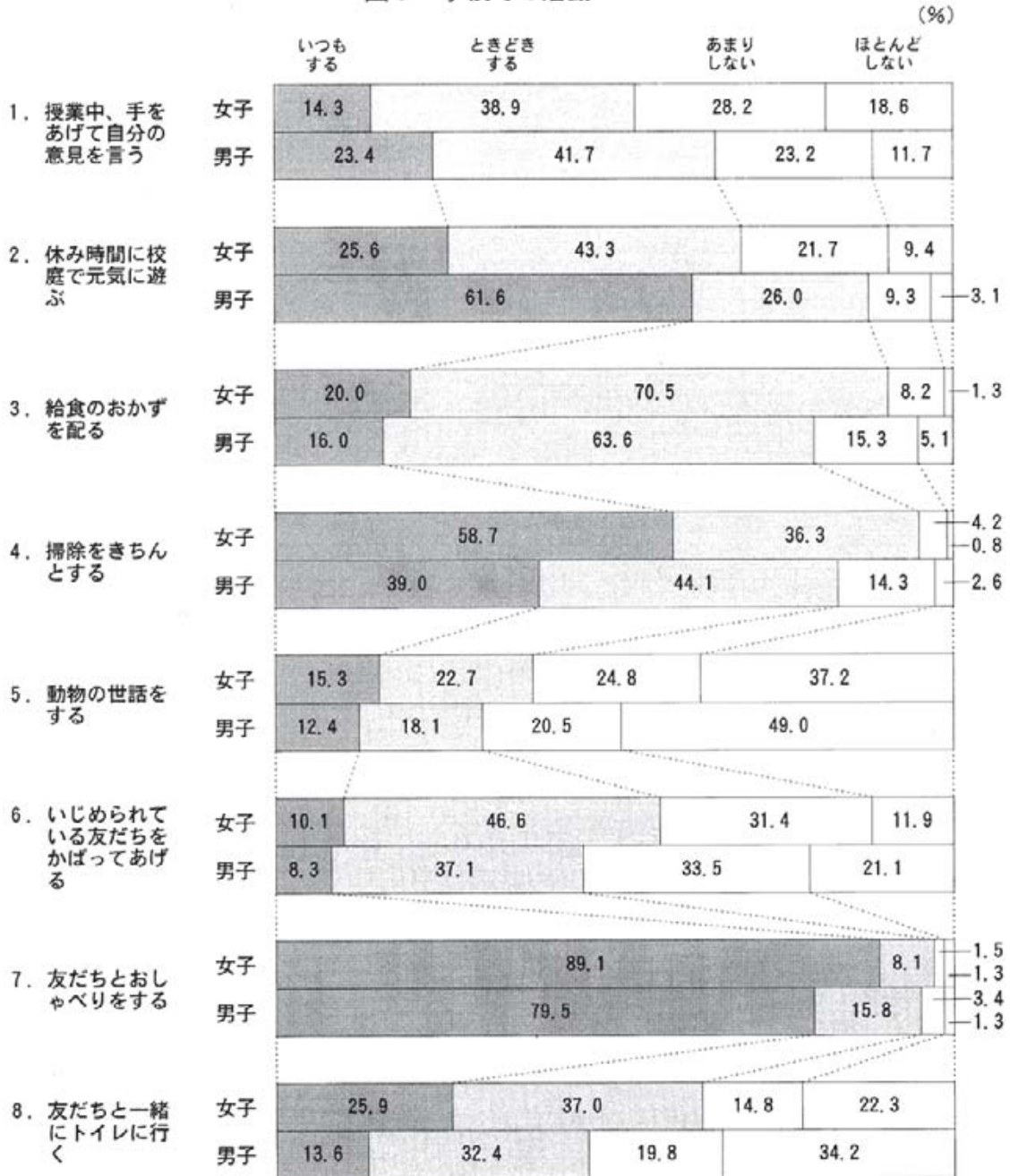


図6 学校での活動



●学校の中のジェンダー・バイアス))

だれでも「男は～であるべき」「女は～であるべき」といった一定の考えを持っているものである。このような性役割に関する偏った思い込みをジェンダー・バイアスと呼ぶ。そのような考え方が、日頃、何気ない子どもとの会話の中に表現され、それが子どもたちの意識の中に入り込み、それが繰り返されるうちに、子どもたち自身のジェンダー観やジェンダー・バイアスの形成に大きく影響を与える。

そのような言葉を教師がどれほど伝えているのか探ってみよう(図7)。まず女子に対して聞いた。女子全体の9%が「女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません」とよく言われている。「ときどき言われる」子どもも

含めると、4割弱がこの言葉を聞いている。次いで多いのが「女の子らしく、行儀よくしなさい」「女の子なのだから、身のまわりをきちんとしなさい」で、2割弱の女子が、学校の先生から言われることを経験している。

同様に男子にも聞いた。「男の子だったら、もっとしっかりしなさい」というのが一番多く、「たくさん言われる」子が6%、「ときどき言われる」子も含めると全体の4分の1にあたる。そのほか、「男の子は、泣いてはいけません」「男の子が女の子に負けるようではいけません」なども1割程度言われている。

乱暴な言葉を使わない、行儀よくする、しっかりするなど、これらすべて男女に共通して必要なことである。しかし、そこに「女

図7 教師が伝えるジェンダー・バイアス

	たくさん言われる	ときどき言われる	ほとんど言われない	ぜんぜん言われない
(女子への質問)				
1. 女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません	8.5	27.7	29.7	34.1
2. 女の子らしく、行儀よくしなさい	4.1	14.6	33.3	48.0
3. 女の子なのだから、身のまわりをきちんとしなさい	4.7	13.4	30.2	51.7
(男子への質問)				
1. 男の子だったら、もっとしっかりしなさい	5.6	20.2	25.9	48.3
2. 男の子は、泣いてはいけません	9.9	20.3	3.1	66.7
3. 男の子が女の子に負けるようではいけません	4.2	6.3	16.4	73.1

だから～、男だから～」という言葉がつくことで、必然的に女の役割、男の役割を規定してしまうことになる。後述するように、親から伝えられるジェンダー・バイアスに比べると、教師のそれは少ない。しかし、教師のひとことの影響力が大きいことはいままでもない。また、男子よりも女子に対して、このような言葉が多く伝えられることも見逃せない。

これまで述べてきたような体験の中で、子どもたちはどの程度、自分の性を不都合と感じているのだろうか。「学校で、女子と男子

を差別されてくやしい」と思った体験について尋ねた(図8)。「たくさんある」と答えた子は男子20%、女子14%で、男子の方がやや上回る。「ときどきある」も含めると女子の方がやや多くなり、女子・男子とも半数近くが体験している。女子だけが差別されているのではない。性によって差別されたという体験は、男子も女子と同様に経験していることがここで明らかになった。

ここで、教師の何気ないひとことが、どの程度子どもたちの差別されたという体験に結

図8 学校で性によって差別された体験

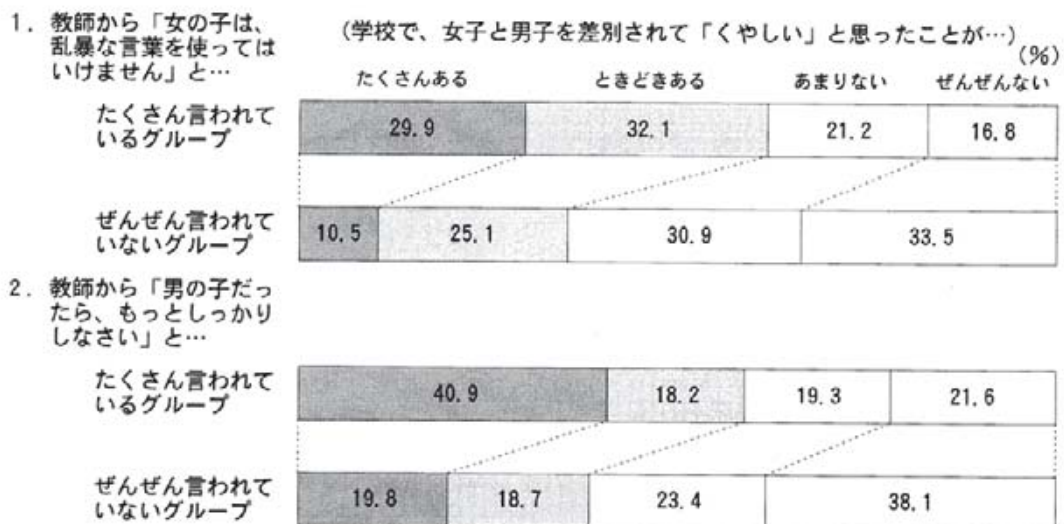
(学校で、女子と男子を差別されて「くやしい」と思ったことが…) (%)

	たくさん ある	ときどき ある	あまり ない	ぜんぜん ない
女子	13.6	30.3	33.1	23.0
男子	20.2	22.0	25.5	32.3

びつくかをみてみよう。図7でみたとおり、学校の先生から「女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません」、あるいは「男の子だったら、もっとしっかりしなさい」などと「たくさん言われる」子どもが1割弱、「ぜんぜん言われない」子どもが4割前後いることがわかった。学校の先生からこれらの言葉を「たくさん言われているグループ」と、「ぜんぜん言われていないグループ」のみを抽出して、この両方で性によって差別された体験がどの程度変化するかを比べた。

図9からわかるように、教師が「男の子だから～」「女の子だから～」とふだん多く口にしていくほど、子どもたちは性による差別を強く感じていることが明らかである。教師の言葉を差別された体験として直接感じるばかりでなく、そのことによってクラス全体が男子と女子を区別する雰囲気になっていることが考えられる。

図9 教師のジェンダー・バイアス × 性によって差別された体験

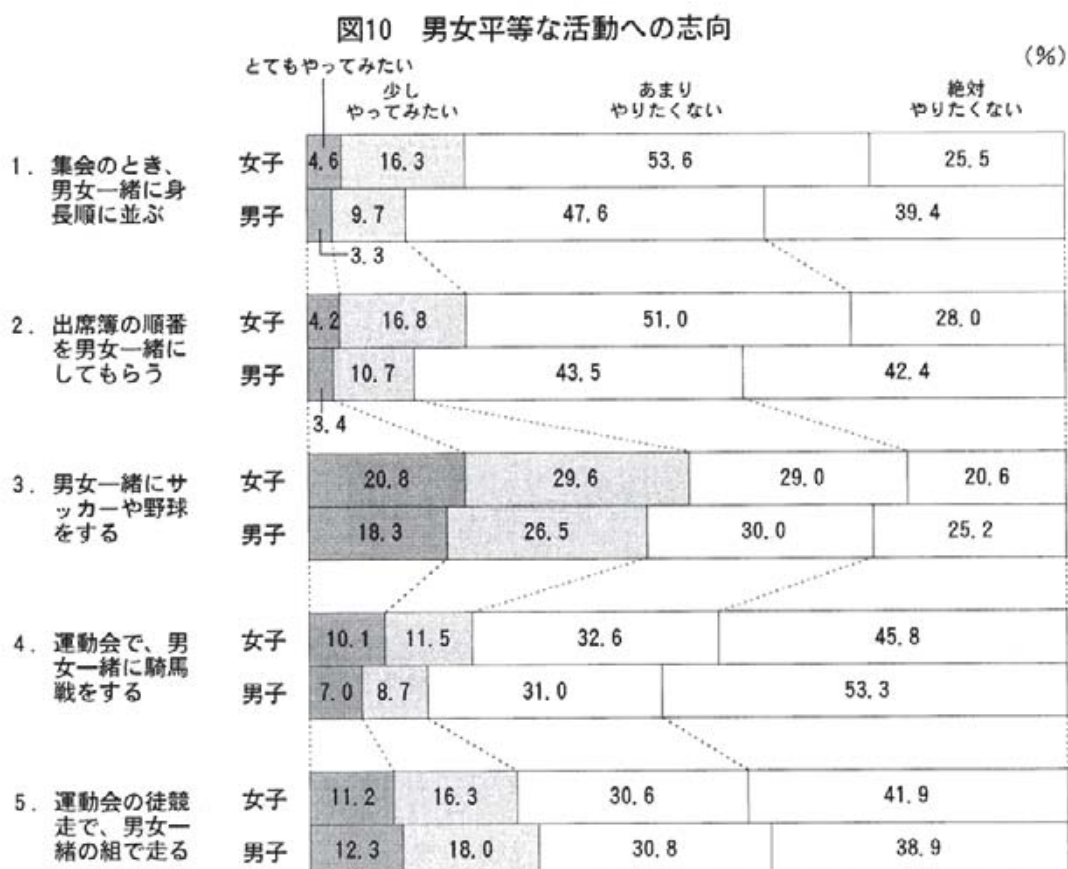


●男女平等：子どもたちはどう考えているか)))

これまで述べてきたように、学校での日常生活が、いかに子どもたちのジェンダー観の形成に大きな影響を及ぼすか明らかになった。男女平等教育、すなわち男であること、女であることによって不利益を被ることなく、個性を伸ばすことができるような教育が実践され始めている。その1つの着目点として、従来、男女で区別されていた枠組みを取り除く試みが行われている。たとえば、男女混合名簿、集会や行事における男女混成などがある。これらについて、子どもたちの意見を聞いてみた(図10)。

この中で一番志向が高いのが「男女一緒にサッカーや野球をする」ことで、4～5割の子どもたちが賛成している。しかし、それ以外の試みに対する子どもたちの支持は低く2～3割にとどまっている。このことは、子どもたちの持つ素直さ、つまり既製の枠組みに疑問を持つことなく、そのまま受け入れる能力を表しているといえよう。

また、ほとんどの項目で男子に比べて女子の支持率が高くなっている。女子の方が、男女の区別をゆるめ、一緒に活動することに積極的な傾向にあることがわかる。





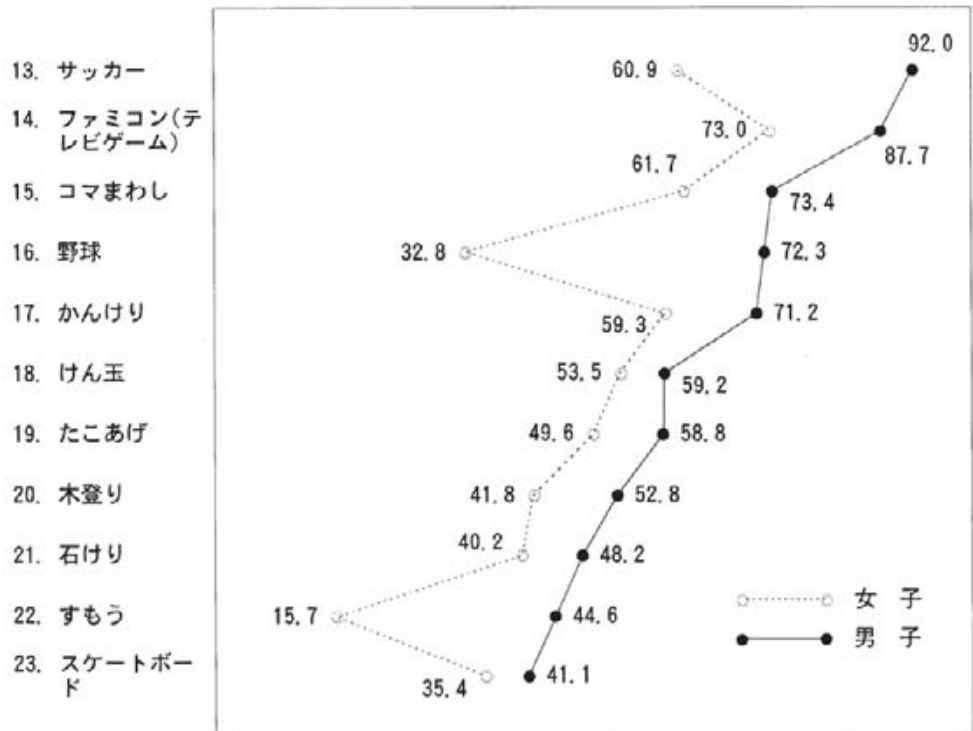
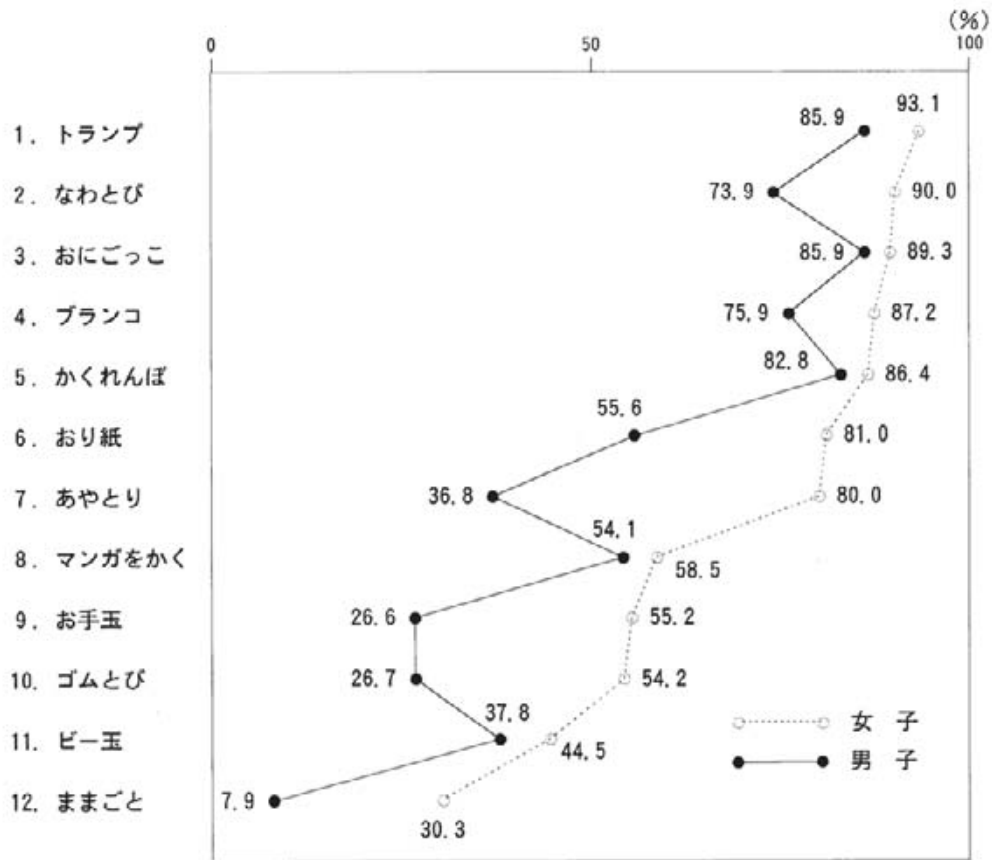
では、子どもの遊びに性差はみられるのだろうか。ここでは遊びと性差との関連について探ってみよう。

まず、図11は子どもたちにどんな遊びをしたことがあるかを尋ねた結果である。これらの遊びを「たくさん」あるいは「少し」したことがある割合をみると、女子では「トランプ」が93%と最も多く、次いで「なわとび」が90%となっており、その他、おにごっこ、ブランコ、かくれんぼが上位を占めている。それに対して、男子についてみると、「サッカー」が92%と最も多く、次いで「ファミコン（テレビゲーム）」が88%となっており、トランプ、おにごっこ、かくれんぼと続く。

今回の調査における、23項目の遊び全体を見渡してみると、性別による遊び経験の差が

大きいものがあることに気づく。女子の方が経験が多いものに、おり紙、あやとり、お手玉、ゴムとび、ままごとなど、どちらかといえば、室内での遊び、他方、男子の方が経験が多い遊びについては、サッカー、野球、すもうなどの外で体を動かす活動的な遊びが多くなっているようだ。この結果をみていると、男の子の遊びと女の子の遊びが、いつのまにか決まっているような気さえてくる。遊ぶとき、男の子のグループと女の子のグループが自然にできて、気づかないうちに、女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく、子どもたちは遊んでいるのだろうか。子どもたちは、女らしさ、男らしさを遊びの中からも学び、毎日の生活の中で再確認しているのかもしれない。

図11 どんな遊びをしたことがあるか



「たくさん」+「少し」ある割合



●「女は家庭、男は仕事」について)))

家庭生活における子どもたちの行動や考え方、それが性別により、どのように異なっているか、さらに親の言動が子どもたちにどのような影響を与えているかについてみていく。

まず、子どもたちが、家庭でどのくらい手伝いをしているかをみていこう(図12)。「ゴミをいつも出す」と答えた子は、男子が27%、女子が19%と男子が上回っているが、他の項目においてはすべて女子の方が多くなっている。特に、食事のしたく、後かたづけで差が大きく、食事の後かたづけをいつもするかどうかに関しては、女子が34%であるのに対し男子は27%、さらに食事のしたくを「いつもする」と答えた子は、女子が30%、男子が19%となっている。つまり、家事は女性の仕事であるという考え方が子どもたちにも浸透し

ているのであろうか。

それでは、このような子どもたちは、「女は家庭、男は仕事」という固定的な性役割分業についてどのように考えているのだろうか。図13は「女の人(ママ)は家の中の仕事や家族の世話が大切だから、あまり外で仕事をしない方がよい」という考え方について尋ねたものである。女子では、「とても・少し」をまとめても賛成が約3割ほどで、半数を超える7割近くの子は反対であるとしているが、男子では「とても賛成」が14%、「少し賛成」が38%と、賛成と回答した子が5割を超える。

次に図14は、同様に「男の人(パパ)は仕事が大切だから、家の中の仕事や家族の世話はあまりしない方がよい」という考え方についての結果を示している。まず、女子についてみてみ

ると、「とても・少し」を合わせても、この考え方に賛成の子は24%ほどで、7割を超える子が反対している。それに対し、男子は賛成の子が4割にも上る。

つまり、女子は「女は家庭、男は仕事」といった固定的な性役割分業に反対する子が7割であるのに対して、男子は賛成する子が4

～5割にも上る。主婦ならぬ主夫という言葉も登場し、育児休業をとる男性やテレビコマーシャルでもエプロン姿の男性を見かけるようになったにもかかわらず、おとなはともかく、子どもにこのような伝統的な価値観が再生産されているとはいかがなものだろうか。

図12 家での手伝い

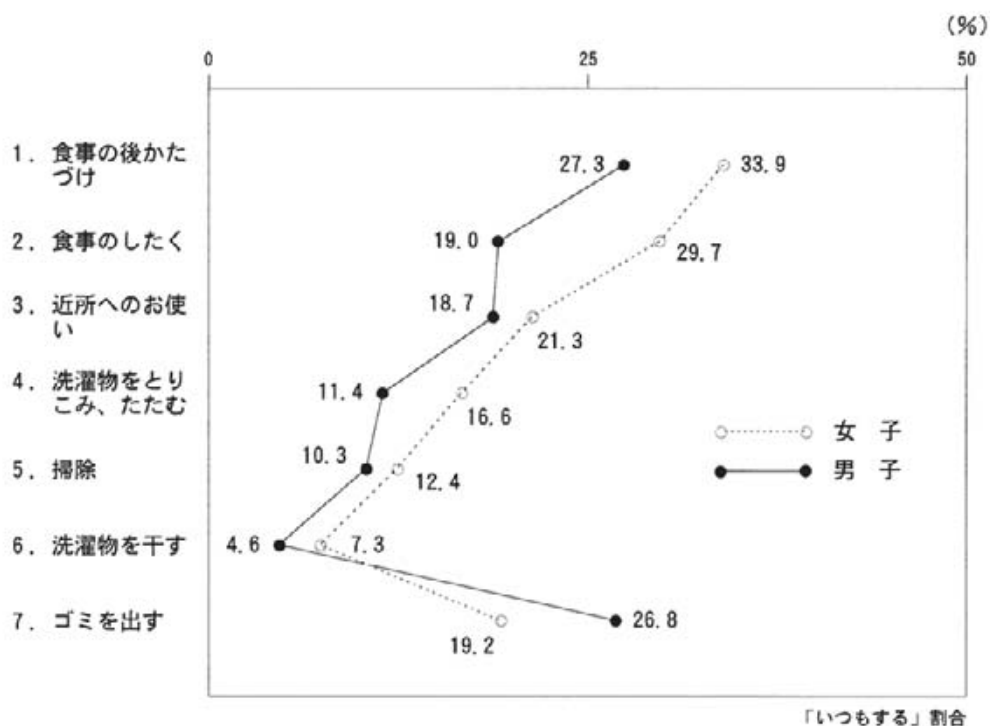


図13 女の人には家庭が大切

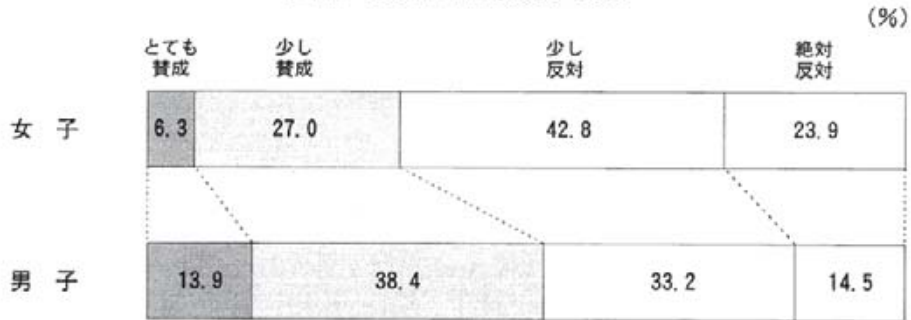
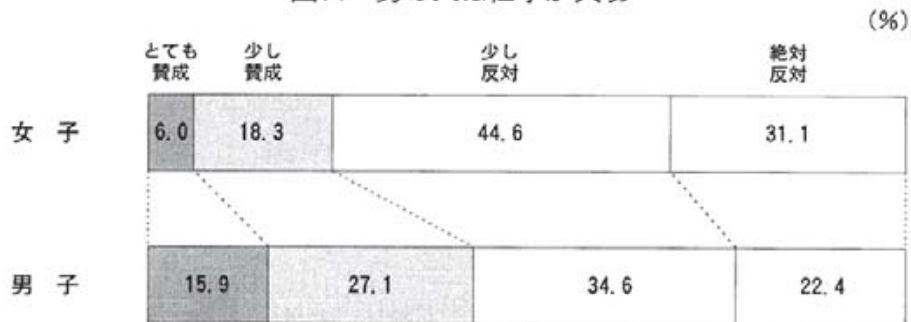


図14 男の人には仕事は大切



●なぜ性別による違いが生じるのか)))

ところで、なぜこのような性別による違いが生じるのだろうか。ここで、子どもたちからみる、親の性役割についてみていこう。まず、表1は子どもからみる親の家事や子どもへの接し方について示している。「いつもお父さん」は全ての項目において低い。それに対し、「朝ごはんの用意」を「いつもお母さんがする」と答えた子は78%、同様に「洗濯」は77%、「夕ごはんの用意」は73%と7割を超える。さらに、「食事の後かたづけ」「掃除」「ゴミを出す」についても、「いつも

お母さん」とする割合が最も高くなっている。

一方、子どもとのやりとりの、「悪いことをしたときに叱る」「勉強や宿題をみてくれる」「休みの日に、一緒に出かける」「子どもと遊んでくれる」は、「だいたい同じくらい」が最も高くなっている。また「子どもと遊んでくれる」については、「たいてい・いつもお父さん」が約5割と他の項目と比較し高い値を示している。

以上をまとめると、子どもを叱ったり、一緒に出かけたりするなど、子どもとのやりと

表1 家庭生活における親の仕事分担

	(%)				
	いつもお母さん	たいていお母さん	だいたい同じくらい	たいていお父さん	いつもお父さん
1. 朝ごはんの用意	77.6	16.9	3.7	1.0	0.8
2. 洗濯	76.8	15.5	5.7	1.1	0.9
3. 夕ごはんの用意	73.4	19.3	5.8	0.9	0.6
4. 食事の後かたづけ	62.9	22.7	11.8	1.8	0.8
5. 掃除	62.2	20.9	12.8	2.7	1.4
6. ゴミを出す	41.1	28.0	19.1	8.1	3.7
7. 悪いことをしたときに叱る	17.6	18.3	49.0	7.9	7.2
8. 勉強や宿題をみてくれる	17.0	20.0	40.1	14.9	8.0
9. 休みの日に、一緒に出かける	8.3	10.6	59.0	13.9	8.2
10. 子どもと遊んでくれる	5.3	7.4	42.3	29.8	15.2

○は最大値

りに関しては、母親と父親がだいたい同じくらいであると子どもは感じているようだ。しかし食事の用意や洗濯、掃除といった家庭のこまごまとした仕事はほとんど母親が行っていると感じており、子どもたちは無意識に、「これらは母親の仕事である」と受けとめてしまっているのではないだろうか。

次に、子どもたちが家庭生活で「女の子だから～」「男の子だから～」というジェンダー・バイアスを含んだ言葉をよく言われるかどうかについて試みる。まず、女子について試みる。表2が示すように、「女の子なのだから、身のまわりをきちんとしなさい」「女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません」で「たくさん・ときどき言われる」子は約6割となっている。さらに、「女の子

らしく、行儀よくしなさい」についても5割を超える。それに対し、男子について試みると、いずれの項目も「たくさん・ときどき」を合わせても「言われる」とする子は少ない。逆に、「ぜんぜん言われたい」とする子が、「男の子だったら、もっとしっかりしなさい」で40%、「男の子は、泣いてはいけません」で56%、さらに、「男の子が女の子に負けるようではいけません」については72%と高くなっている。

親はジェンダー・バイアスを含んだ言葉を女の子に対してはよく口にするが、男の子にはそれほどでもないようである。

表2 親が伝えるジェンダー・バイアス

(1) 女子

	(%)			
	たくさん言われる	ときどき言われる	ほとんど言われたい	ぜんぜん言われたい
1. 女の子なのだから、身のまわりをきちんとしなさい	23.1	33.1	> 23.0	> 20.8
2. 女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません	20.0	38.1	> 23.3	> 18.6
3. 女の子らしく、行儀よくしなさい	18.5	35.1	> 26.1	> 20.3

(2) 男子

	(%)			
	たくさん言われる	ときどき言われる	ほとんど言われたい	ぜんぜん言われたい
1. 男の子だったら、もっとしっかりしなさい	10.0	< 24.3	< 25.3	< 40.4
2. 男の子は、泣いてはいけません	6.9	< 13.2	< 23.6	< 56.3
3. 男の子が女の子に負けるようではいけません	5.2	< 6.6	< 15.9	< 72.3

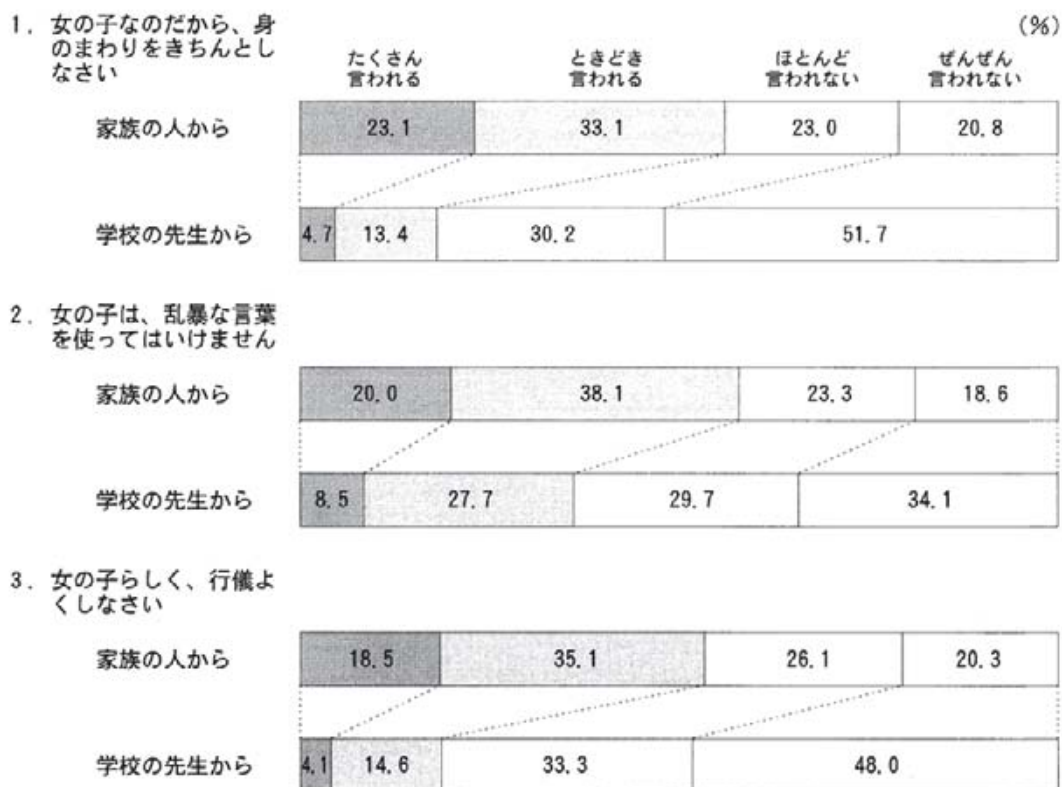
ところで、このジェンダー・バイアスを含んだ言葉を子どもたちは、家庭と学校ではどちらで多く耳にするのだろうか。ここでは、おとなが伝える言葉のジェンダー・バイアスについて、家庭と学校を比較してみよう。

まず女子についてみていこう。図15によれば、「女の子なのだから、身のまわりをきちんとしなさい」について、家族の人から「たくさん・ときどき言われる」子は56%であるが、学校の先生からは18%となっている。同

様に「女の子は、乱暴な言葉を使ってはいけません」「女の子らしく、行儀よくしなさい」についても学校の先生より、家族の人から言われる割合が非常に高くなっている。

次に、男子について図16に示したが、「言われる」とする子が少ない中で、女子と同様に「男の子だったら、もっとしっかりしなさい」など、すべての項目について家族の人から「言われる」とする子が多くなっている。つまり、子どもたちは、このようなジェン

図15 おとなが伝えるジェンダー・バイアス（女子）



ダー・バイアスを含んだ言葉を家庭で聞くことが多い。さらに、「男らしく～しなさい」というより、むしろ女子が「女らしく～しなさい」とうるさく言われているようだ。このような家族の人の何気ない言葉が、子どものジェンダー観の形成に影響を与えているのかもしれない。

以上、家庭生活とジェンダーについてみてきた。家庭において、家事の分担や「女だから～」「男だから～」という言葉などで、親

が無意識のうちに、子どもに「女らしく、男らしく」行動するよう、期待していることがうかがえる。また、親は特に、女子に「女だから～」という言葉の口にしてることが多いようで、女の子は、その期待に応えるかのように、家でもよく手伝いをしている。しかし、「女は家庭、男は仕事」といった性役割分担の考え方に反感を持っている女子も多く、そのパワーを、これからどのように生かしていくかが問われることであろう。

図16 おとなが伝えるジェンダー・バイアス（男子）

(%)

	たくさん 言われる	ときどき 言われる	ほとんど 言われない	ぜんぜん 言われない
1. 男の子だったら、もっとしっかりしなさい				
家族の人から	10.0	24.3	25.3	40.4
学校の先生から	5.6	20.2	25.9	48.3
2. 男の子は、泣いてはいけません				
家族の人から	6.9	13.2	23.6	56.3
学校の先生から	3.1 9.9	20.3		66.7
3. 男の子が女の子に負けるようではいけません				
家族の人から	5.2	6.6	15.9	72.3
学校の先生から	4.2	6.3	16.4	73.1



●どんな仕事につきたいか)))

最後に、子どもたちが思い描く自分の将来の姿とジェンダーについてみていくことにしよう。

まず、図17は「将来、学校はどこまで行きたいか」と、進学希望について尋ねた結果である。「中学校まで」は男女ともわずかで、「高校まで」は女子20%、男子33%と男子が多くなっているが、「専門学校」「短大」は女子が多くなっており、「専門学校」24%、「短大」20%を合わせると4割を超える。また「4年制の大学」「大学院」は若干、男子の進学希望が多くなっている。

それでは、子どもたちはそれぞれ、学校を卒業した後、どんな仕事につきたいと思っているのだろうか。

図18は子どもたちが将来、やってみたい仕事についての結果である。まず、女子は「幼稚園や保育園の先生」の71%が最も多く、次いで「ケーキ屋さん」が58%、「タレント」と「お花屋さん」が51%と続く。それに対し男子は「スポーツ選手」がトップで74%、次いで「タレント」と「マンガ家」が44%、「コックさん・板前さん」が43%、さらに「宇宙飛行士」が41%となっている。

図17 進学希望

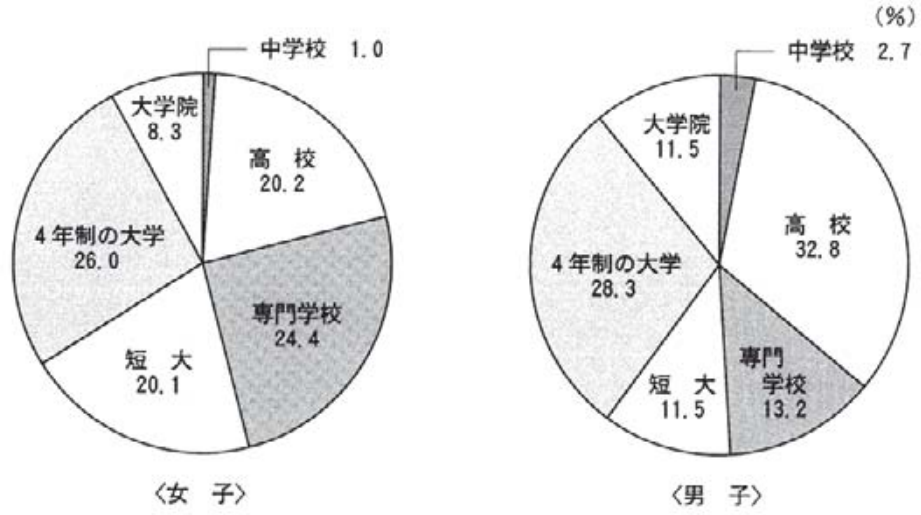
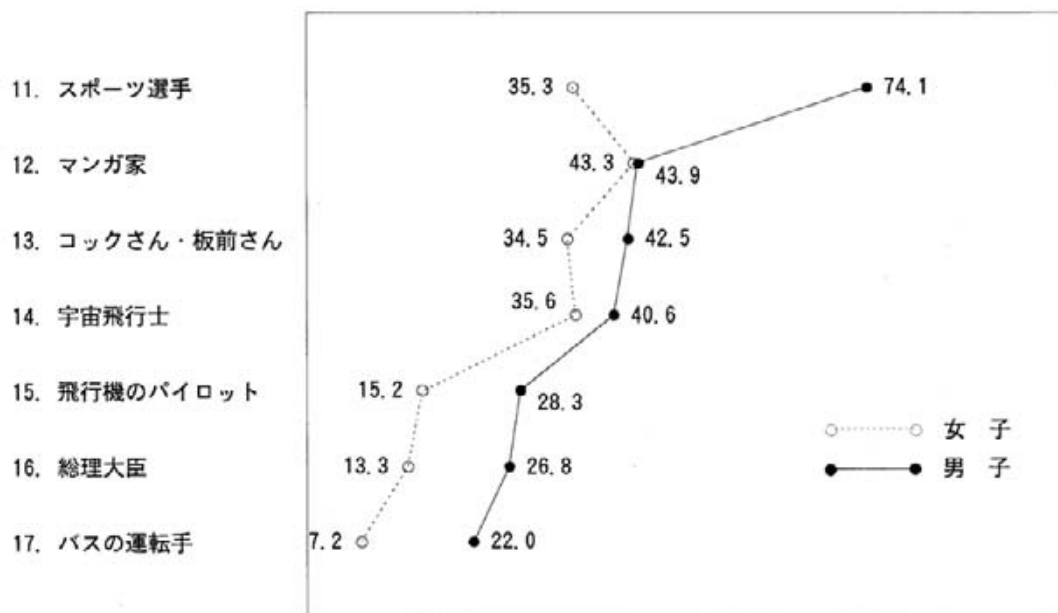
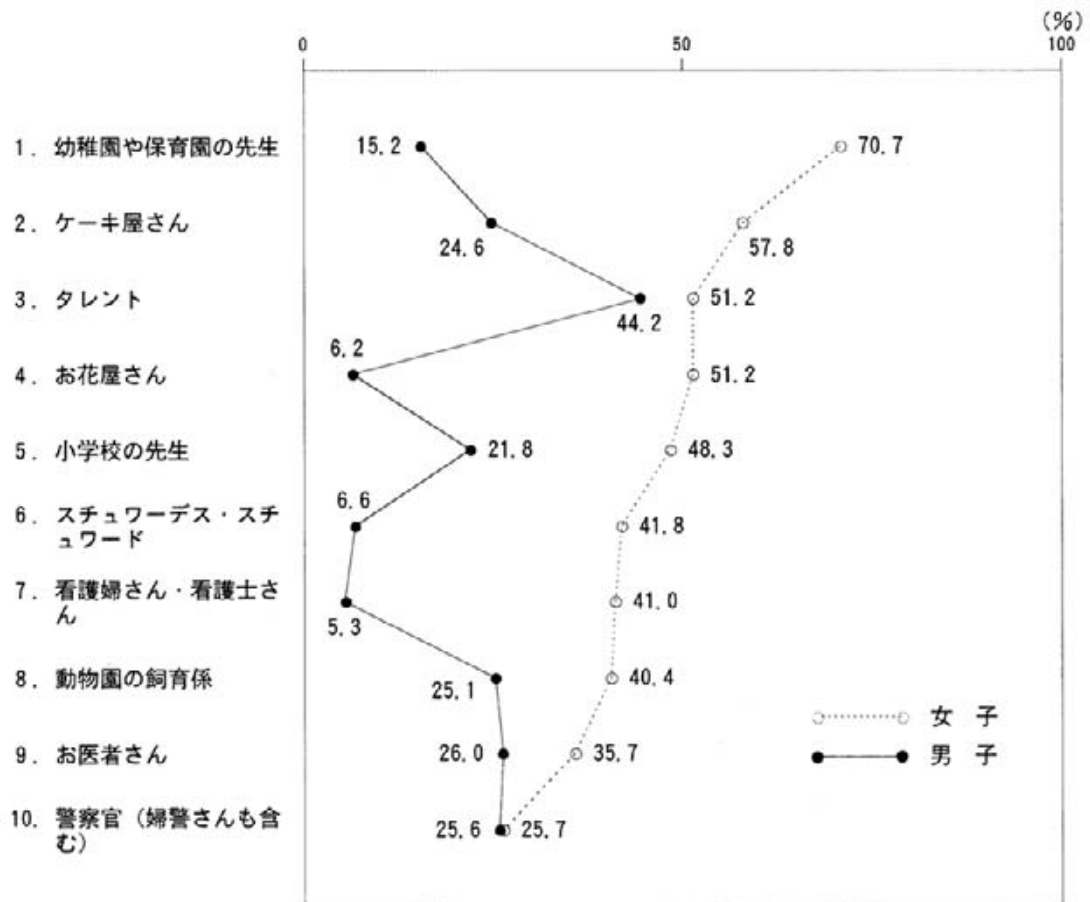


図18 将来、やってみたい仕事

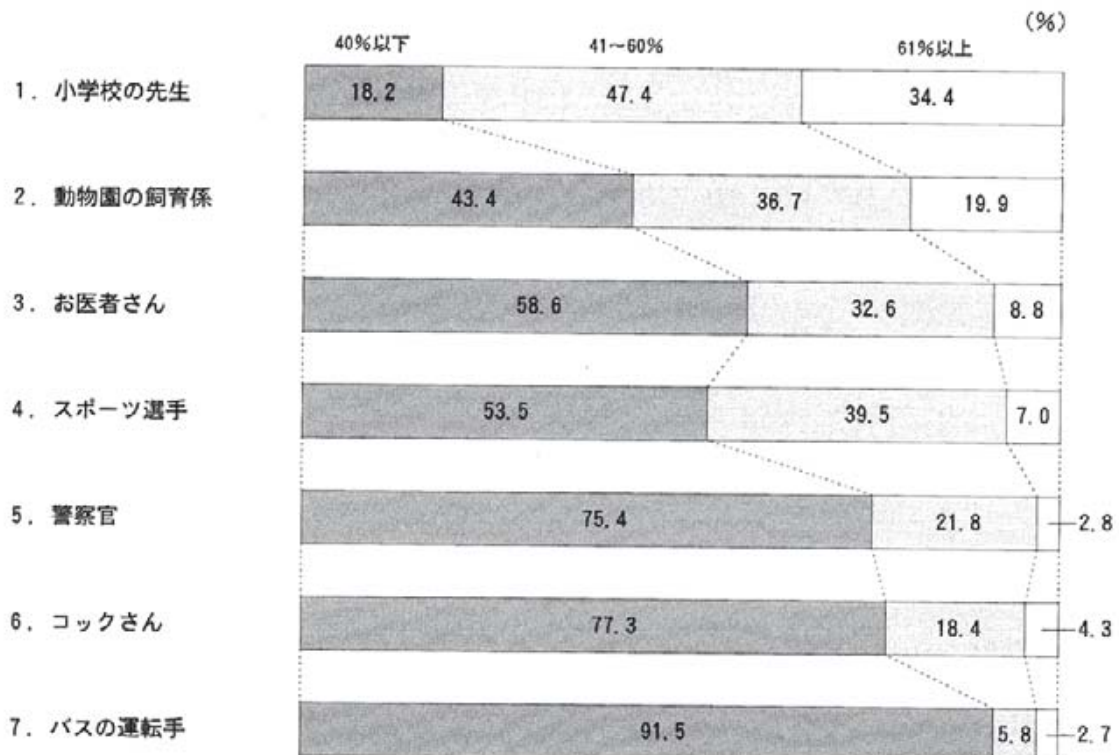


「とても」+「少し」やってみたい割合

それでは、ここで、いくつかの職業について、子どもたちからみる女性の人数を「次の仕事の人100人いたら、女の人は何人くらいいると思うか」と尋ね、推測してもらった結果をみてみよう。図19によると、女性が最も多いと推測した職業は、「小学校の先生」

で、女性が「40%（40人）以下」と答えた子は18%しかおらず、逆に「61%（61人）以上」は34%となっている。一方、女性が最も少ないとした職業は、「バスの運転手」で、女性が「40%（40人）以下」とした子が9割にものぼる。

図19 女性占有率の推測



次に表3は、職業の女性占有率（推測）の結果を平均値で示している。「小学校の先生」が56%、「動物園の飼育係」が46%、「お医者さん」が38%となっている。また、ほとんどの職業について、女子の方が人数を多く推測している。

それでは実際の女性の職業占有率はどうなっているのだろうか。表4をみてみよう。「小学校の先生」が59%と子どもの推測と近いがその他、全ての職業について、実際は、子どもたちの推測よりもはるかに女性の割合は少ないのである。子どもたちの目には、その職業における女性の活躍が目立つために多く推測したのだろうか。もしかしたら、子どもたちが想像している以上に、現実には固定的な性役割観が根強い世界なのかもしれない。

表4でいくつかの職業について、女性占有率を実際にみてきた。ここではその他、子どもたちがあこがれる職業の、女性占有率をま

とめてみた(平成2年国勢調査報告、総務庁)。(%)

看護婦・看護師	96.9
幼稚園の先生	94.5
保母・保父	92.3
美容師・理容師	68.9
薬剤師	59.0
デザイナー	50.2
写真家・カメラマン	10.5
裁判官・検察官・弁護士	5.9
パイロット(航空機関士を含む)	0.2
電車(気動車)運転士	(4人)

電車(気動車)運転士は約4万人であったうち、女性は4人ほどであった。

職種によって、男女比にかなり偏りがあることがわかる。子どもたちが将来に描く夢はどうなるだろうか。われわれはもっとジェンダーに関し、真剣に考える必要がある。

表3 女性占有率の推測（平均）

(%)

	女子	男子	全体
1. 小学校の先生	58.1	54.7	56.4
2. 動物園の飼育係	45.9	45.9	46.0
3. お医者さん	39.1	36.9	38.0
4. スポーツ選手	41.8	32.8	37.4
5. 警察官	35.1	31.3	33.2
6. コックさん	30.6	27.8	29.2
7. バスの運転手	18.4	18.5	18.5

表4 女性占有率の実際

(%)

小学校の先生	58.5
お医者さん（医師・歯科医師）	12.0
スポーツ選手（職業スポーツ家）	6.1
警察官（海上保安官を含む）	3.4
バスの運転手（自動車運転者）	1.3

参考：平成2年国勢調査報告
 （スポーツ選手については職業スポーツ家で個人に教授するものを除く）

●将来像とジェンダー)))

次に子どもたちは将来、どんな人になりたいと思っているのだろうか。子どもたちの将来像について図20に示した。「お金をたくさんもうけて、お金持ちになる」は女子61%、男子75%、「仕事をバリバリする」は女子46%、男子67%、さらに「えらくなって、有名になる」では女子40%であるのに対し、男子は60%と、男子の方が積極的である。一方、「世の中の困っている人たちを助けてあげる」では女子86%、男子80%、また「自分の子どもを大切に育てる」では女子93%、男子89%となっており、逆に女子の積極さがみうけられる。

以上より、お金持ちになったり、仕事を一生懸命にしたり、さらに有名になったりと

いった社会的達成に関して、性別による差が大きく、特に男子が積極的である。また、困っている人を助けたり、子どもを大切に育てるといった、他者に対する配慮や子育てについては男女ともに高い値を示しているが、特に女子の方が高くなっている。

ところで、将来、希望する職業や将来像は自分の性を肯定しているかどうかによって変わってくるのだろうか。「女に生まれてよかったと思ったことはあるか」と尋ねた結果は図21のとおりである。

ここでは、自分の性に生まれてよかったかどうか（自分の性を肯定しているかどうか）と、将来やってみたい仕事と将来像との関連についてみていこう。

図20 将来、どんな人になりたいか

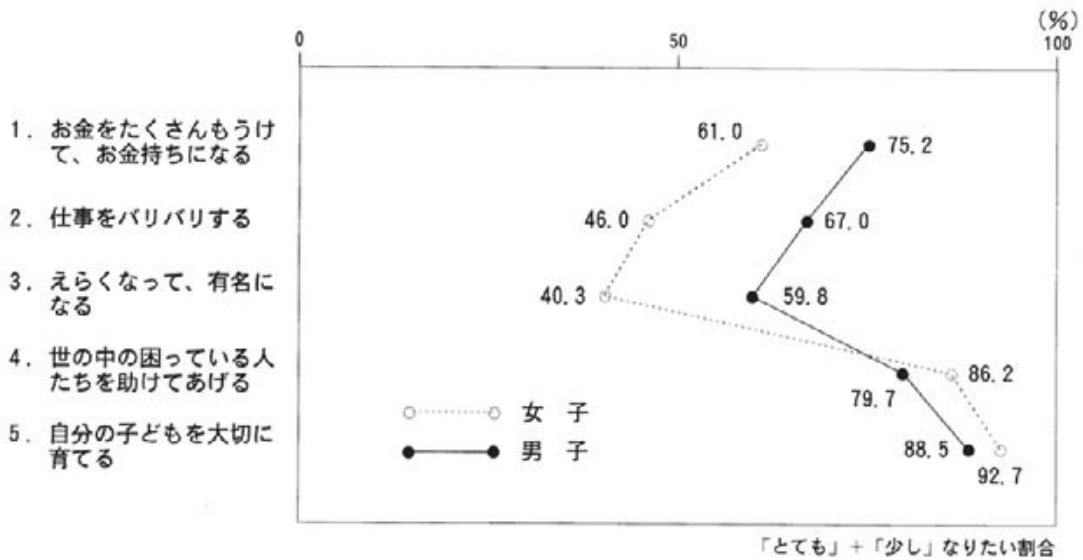


図21 「女、あるいは男に生まれてよかった」と思ったことはあるか

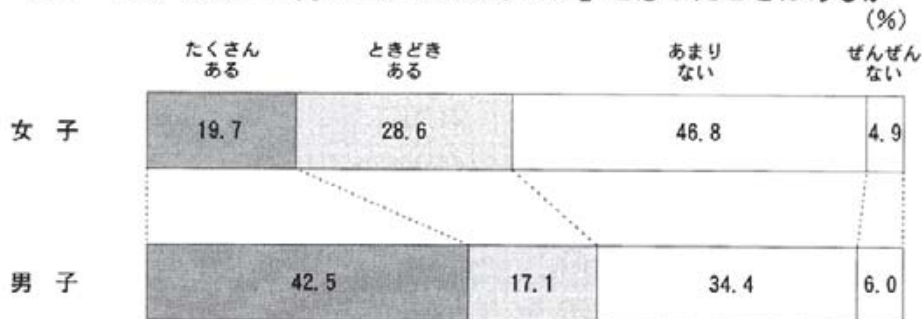


表5は、自分の性の肯定度と将来、やってみたい仕事との関連を示している。女子も男子も自分の性を肯定している子の方がほぼ全ての職業に対して、関心を示す割合が高くなっており、幅広い分野に対しての積極的な態度がうかがえる。

次に、将来像はどうなっているのだろうか。図22によれば、女子、男子ともに自分の性を肯定している子どもの方が「お金をたくさんもうけて、お金持ちになる」「仕事をバリバリする」「えらくなって、有名になる」といった社会的達成、および「世の中の困っている人たちを助けてあげる」「自分の子どもを大切に育てる」といった他者に対する心遣いや、子育てについてのすべてに関して、達成意欲が高くなっている。

以上、子どもの将来とジェンダーについてみてきた。将来希望する職業に関しては女子と男子で異なっており、それは現実の社会で

女子が多い職業と男子が多い職業とを、子どもたちがいつのまにか学習し、将来の職業選択をしているようである。また将来像にしても、社会的な達成は男子が積極的で、他者への心遣いや子育ては女子の方が意欲的であった。さらに、最も懸念されることは自分の性を肯定しているかどうかで、職業選択、将来像に差が出てきていることであり、肯定している子どもたちは職業選択の幅も広く、自分の将来も明るく思い描いている。しかし、自分の性を否定している子どもたちは職業選択および自分の将来に影を落としていることがうかがえる結果であった。

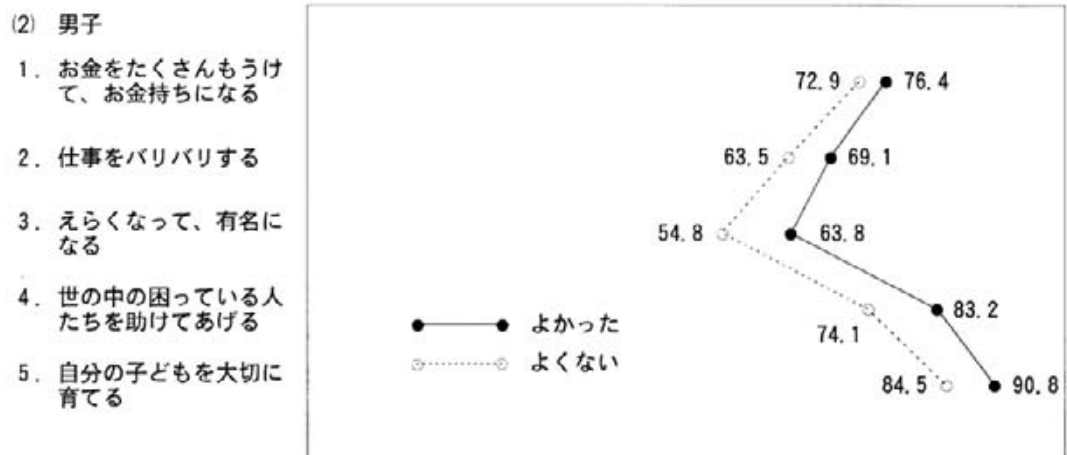
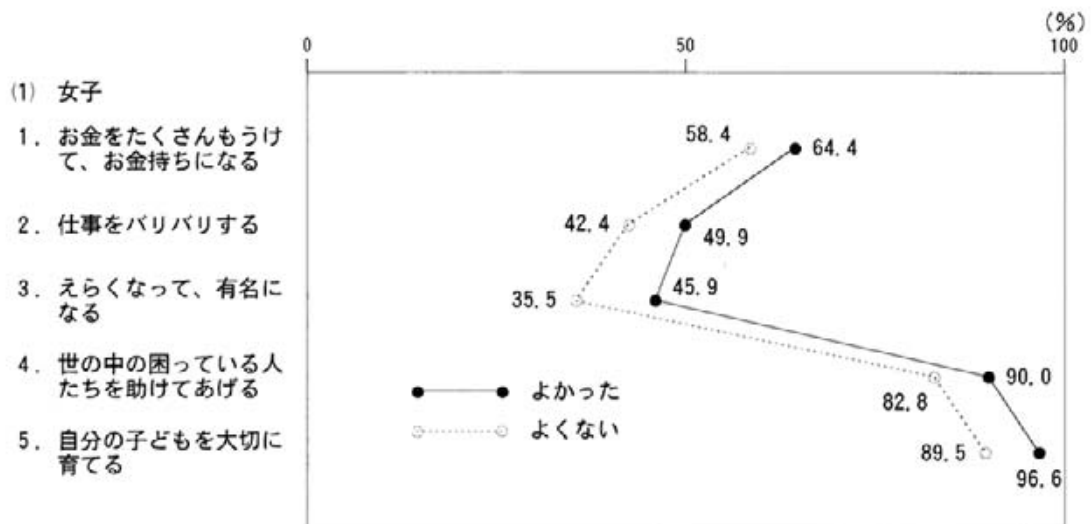
子どもにとってのジェンダー・バイアスは現実の行動を制限するだけでなく、大きな可能性を秘めた将来像にまで影響を与えている。子どもたちにとって、真の自分らしさを追い求められる環境を整える必要があるように感じた。

表5 将来、やってみたい仕事 × 自分の性に生まれてよかった

	女 子		男 子	
	よかった	よくない	よかった	よくない
1. スポーツ選手	39.2	> 31.9	80.0	> 66.8
2. マンガ家	46.7	> 40.2	45.6	> 41.2
3. コックさん・板前さん	39.5	> 30.0	44.1	> 40.8
4. 宇宙飛行士	39.4	> 31.9	42.3	> 37.7
5. 飛行機のパイロット	17.4	> 12.9	29.1	> 27.2
6. 総理大臣	15.4	> 11.2	27.0	> 26.8
7. バスの運転手	7.8	> 6.7	21.9	< 22.1
8. 幼稚園や保育園の先生	76.6	> 65.5	16.7	> 12.5
9. ケーキ屋さん	65.2	> 50.9	24.8	> 22.4
10. タレント	61.0	> 42.3	49.1	> 37.1
11. お花屋さん	57.7	> 44.6	5.8	> 5.5
12. 小学校の先生	52.9	> 43.9	22.2	> 20.7
13. スチュワーデス・スチュワード	48.9	> 35.2	6.8	> 5.6
14. 看護婦さん・看護師さん	47.3	> 34.8	5.0	> 4.8
15. 動物園の飼育係	44.2	> 36.9	25.4	> 24.6
16. お医者さん	39.8	> 31.2	26.3	> 25.9
17. 警察官（婦警さんも含む）	29.7	> 22.1	27.6	> 22.7

「とても」＋「少し」やってみたい割合

図22 将来、どんな人になりたいか × 自分の性に生まれてよかった



「とても」+「少し」になりたい割合

まとめ

少なくとも建て前の上では、「男の子はたくましく、女の子はおしとやかに」あるいは「男は仕事、女は家庭」というように、性別によって役割を明確に分ける考え方は過去のものとなった。しかし、今回の調査でも、男女の役割分担はいたるところにみられた。たとえば学校では教科や係活動の志向、活発さなど、家庭での手伝い、将来の職業選択などである。これをみて、われわれおとなたちは、ふだんの言動について見直さなければならない。なぜなら、子どもたちの抱く男女観は、子ども独自のものではなく、おとな社会を如実に反映しているからである。

性（ジェンダー）の問題は、2つの意味でむずかしい。1つは、われわれの持つ男女観が心の奥に潜み、ふだん自分自身が意識することがない点である。だれでも「男性はこういうもの、女性はこういうもの」という価値基準を持っているはずである。本人にとってそれは自明のことであり、改めて意識したり考えることはない。しかし、日常の何気ない会話や行動の中に隠れたメッセージとして表現される。それを受けとった側も、そのことに気づかずに「当たり前のこと」として受けとっている場合が多い。このようにして、家庭、学校、社会などで特定のジェンダー観が共有されることになる。

もう1つのむずかしい点は、男女のあり方が、その時点の文化的・時代的背景によって規定されており、時代を超えた正しいあり方というのが存在しないところにある。30年前の高度経済成長期には、長時間働く男性と、それを家庭で援助する女性のあり方が規範で

あった。ところが現代では男性の労働負担が軽減され、子どもの数が減り、家事の負担も軽くなり、長寿化によって子育てが終わった後の生き方が求められるなど、これまでとは異なる時代背景の中で、より平等で自由な男女のあり方が模索されている。決して30年前の男女観が間違っていたわけではない。ある時点で機能していた規範も、時代背景が変遷すると機能しなくなってしまうのである。

では、具体的に、われわれは21世紀を生きる子どもたちのジェンダー形成のために、何ができるのだろうか。まず、自分自身が内に秘めたジェンダー意識に敏感になることである。そうすれば気がつかずに、子どもに自分の持つジェンダー・バイアスを伝えなくてすむ。「女（あるいは男）だから～してはいけない」というように、性によって子どもの行動や個性を制限することはぜひとも避けたい。むしろ「女（あるいは男）だから～できる」というように、子どもの可能性を広げるメッセージを多く伝えたい。

すでに、新しいジェンダーに向けた男女平等教育はスタートしている。社会、理科、道徳、性教育などの教科でジェンダー理解を教えたり、出席簿、行事、集会、座席、ロッカーなど日常の生活を男女混成にするなどの試みが行われている。

今回の調査では、「男に生まれて損した」と感じる男子よりも、「女に生まれて損した」と感じる女子の方が多かった。このギャップをなくし、自分の性に本当の意味での誇りを持てる社会を築くことが、われわれに課せられた課題である。

